

一般財団法人沖縄美ら島財団 総合研究センター

第3回活動報告会

美ら島再発見

～動物、植物、琉球文化から迫る～

発表要旨

と き：令和元年9月29日（日）

ところ：沖縄県立博物館・美術館（おきみゆー）講堂

美ら島再発見～動物、植物、琉球文化から迫る～

日時：2019年9月29日（日）13時30分～16時00分

会場：沖縄県立博物館・美術館（おきみゅー）講堂

目次

■はじめに

（一財）沖縄美ら島財団 理事長／花城 良廣 …………… p.1

■活動報告要旨

「沖縄の自然を学ぶ～貝類からのアプローチ～」

普及開発課／伊藝 元 …… p.2

「近世琉球における食のウトウイムチ」

琉球文化財研究室／勝連 晶子 …… p.4

「培養技術で琉球列島のランを守る」

植物研究室／徳原 憲 …… p.6

「水族館発！サメの繁殖生態学最前線」

動物研究室／富田 武照 …… p.8

■参考資料

（一財）沖縄美ら島財団 総合研究センターの紹介 …………… p.10

総合研究センター
イベント情報



<http://churashima.okinawa/ocrc/>

研究成果
H30年度 事業年報



https://churashima.okinawa/ocrc/business_report_h30/

はじめに

沖縄美ら島財団は、「美らなる島の輝きをうまんちゅへ」の理念の下、沖縄の自然、歴史・文化に関する調査研究と技術開発、普及啓発活動、公益性の高い事業を展開するほか、沖縄観光の拠点施設の管理運営を行っています。

これらの事業を推進するため、財団は総合研究センターを設置し、動植物、海洋文化、琉球文化財に関する調査を行い、その成果を普及し、地域に還元、産業振興や自然環境・琉球文化保全に資することとしております。具体的には、希少動植物に関する調査、在来種を脅かす外来種駆除、熱帯・亜熱帯の果樹・花木・種苗の生産・管理に関する調査、そして離散した琉球文化財の収集、復元などがあります。

今回も動植物や文化の調査、教育活動のなかから4つのテーマを設けました。まずは、子供たちも含めた一般の方々に、いかに沖縄の自然についてわかりやすく楽しく伝えるか、身近な生き物「貝類」をテーマとした教育プログラムを例にお話しいたします。現在も受け継がれている琉球料理に関する研究では、長い歴史の中で様々に変化してきた食文化について、古文書を紐解くことで歴史に刻まれた事実を確認する重要な調査も行っております。その中から、首里王朝における薩摩役人に対する「おもてなし」の作法についてご説明します。その他にも、希少な動植物の保全活動として、ジンベエザメをはじめとしたサメ・エイ類の2世誕生への取り組み、絶滅危惧の植物を人工的に培養するテクニクのお話など、様々な分野からの試みをご紹介します。

本日の講演を通し、「美らなる島の輝き」を「再発見」していただければ幸いです。また、配布しております資料には、財団の様々な取り組みを紹介させていただいております。こちらの方もご参考いただければと存じます。

(一財) 沖縄美ら島財団
理事長 花城 良廣

沖縄の自然を学ぶ ～貝類からのアプローチ～

普及開発課 伊藝 元

【はじめに】

沖縄では、昔から生活の中で魚介類を利用してきました。中でも貝類は、食用以外にも装飾品や漁具、魔除け等幅広く利用され、現在でもその名残を見受けることができることから、人々と貝類の繋がりが深いことが伺えます。

しかし近年、自然海岸の減少などの影響で、貝類をはじめとした生き物に触れる機会が少なくなっています。そこで、自然との触れ合いや生き物の不思議さ、面白さなどを少しでも多くの方に感じてもらうべく、海岸で気軽に見られる貝類に着目した学習会を実施し、普及活動を行っています。

【貝類を題材にした学習会】

沖縄美ら島財団では、2009年に閉校した名護市立嘉陽小学校の跡地を利用し、普及啓発事業の拠点として、2015年から「美ら島自然学校」を運営しております。美ら島自然学校の地先には豊かなサンゴ礁が広がり、海洋生物を題材とした学習には最適な環境です。貝類などの海の自然を学ぶ学習会は2017年より実施、生き物の観察を通して参加者は新たな興味を見出しています。

事例1) 身近な貝を新たな視点で観察する

沖縄で食用になり、なじみの深い「マガキガイ（方言名：ティラジャー）」を使った学習会を開催しています。ティラジャーの仲間には、クモガイやスイジガイがいて、これらも同様な特徴を持っていることなどを紹介しています。「食用である」ことは認知されていますが、あまり知られていないティラジャーの特徴、例えば貝殻の隙間から出てくる目玉の観察や、貝とは思えぬ飛び跳ねる行動するなど、参加者は興奮気味に観察しています。



マガキガイの2つの“目”

事例2) 貝類からみる環境の観察

貝類を観察すると、波しぶきの当たる場所を好む貝類、転石下を好む貝類、砂地や藻場を好む貝類等、生息場所が異なることから、その場所の環境を知ることができます。このプ



学習会の様子

ログラムでは、貝類を探すポイントを案内しながら参加者自身に貝類を探してもらうなど、参加者一体型の学習を意識しています。多くの参加者が様々な種類の貝類を見つけることで興味を引き出し、その生態や特徴、および周辺環境に興味を持つよう促しています。



危険なイモガイの一種
タガヤサンミナシ

事例3) 危険な貝の紹介

野外学習会では、危険なイモガイ類に遭遇する可能性もあることから、事前学習としてイモガイ類の見分け方、危険性、被害を防ぐ方法等、標本や画像や動画を交え学習を行います。イモガイ類は毒を使って魚類や貝類を麻痺させ食べる習性があります。ただ「危険」というだけでなく、何故そんな強い毒をもっているのか、どう役立てているのかも学ぶと、生き物や自然の仕組みの奥深さを感じることができます。

事例4) 新たな貝を使った学習プログラム (計画)

沖縄の白い砂浜は、様々な海の生物の殻や骨格から成るのですが、この中にはとても小さな貝殻が含まれています。一般的に「微小貝」と呼ばれ、色や模様が美しい種類も多く、これらが沖縄のきれいな砂浜を作っていると言っても過言ではありません。研究センターでは、砂の学習会を行っていますが、今後、微小貝に注目して砂の組成を調べるアプローチを考えています。



砂を彩る微小貝

「貝類」の話をするとう「食べられるのか」という話題は必ず上がります。「美味しい貝」と「食用に向かない貝」、「地域によっては食用にされている貝」についても学習会の中で紹介しています。チョウセンサザエやヤコウガイ、シャコガイ類などは特に美味ですが、これらは沖縄の貴重な水産資源で漁業者以外採捕禁止、などの情報は非常に重要です。自然を保全しながら、持続可能な利用の仕方についても広く知ってもらうような普及啓発を続けて行こうと考えています。



食用となるヒメジャコ

近世琉球における食のウトウイムチ

琉球文化財研究室 勝連 晶子

【はじめに】

琉球文化財研究室では、2016年度より琉球王国時代から現代にいたる琉球・沖縄の食文化の発展・継承を目的に、①「琉球料理 美栄」（1958年創業）における料理の記録調査や②王国時代の文献史料からの食文化に関する情報の抽出・解読などを行っています。

琉球王国時代に料理が発展した背景には、対外関係による影響が指摘されています。中国から来琉する冊封使節団や、琉球統治のために駐在する薩摩役人らをもてなすために料理人が養成され、中国や薩摩（日本）の食文化を取り入れた饗応料理が作られるようになり、次第に首里の上級士族、那覇の士族層へと普及していったと考えられています。冊封使の歓待料理については、これまで安次富順子氏や鄔揚華氏らによる研究・再現がなされています。

一方で薩摩役人への接待については、漆器の使われ方などを対象とした岡本亜紀氏の研究がありますが、料理の内容・献立に関する研究は少なく、これらを明らかにする研究が必要です。本報告では、文献史料にみる食を通じての薩摩役人へのもてなしの事例を紹介します。

【薩摩役人へのウトウイムチ（おもてなし）】

1609年の島津氏の侵攻により琉球王国は制圧され、薩摩藩による統治が始まりました。1628年には那覇に御仮屋と称される薩摩藩の出先機関が設置され、在番奉行を筆頭に附役、筆者、与力等が鹿児島から派遣されて公務にあたりました。のちに唐物方（のち産物方に改称）など他の役職も設けられていきました。在番奉行らの着任・離任時、年頭祝儀、暑中・寒中見舞の際には、首里王府主催による接待が首里城で執り行われましたが、史料的制約により詳細はわかりません。ただし、首里や那覇の士族がのこした私日記や公務（業務）日記には、彼らが役人らをもてなした際の記事が散見されます。

1. 「御三代伊江親方日々記」（1784～1816頃）にみる接待・贈答の事例

本史料は首里士族・伊江朝睦が三司官在任中から隠居後に認めた日記です。例を挙げると、1808年の2月14日に在番奉行の北条織部を自宅に招き、三献の酒礼後、場所を移して本膳料理、御盛合菓子、間之吸物、御取肴をふるまうなど日本の形式に倣ったとみられる次第でもてなしています。翌3月には北条へ「安否御尋（あんぴおたずね）」として唐風菓子「きんそかう」（ちんすこう）を堆錦の重箱に入れて贈り、その翌日には北条より「珍敷御菓子」へのお礼が

あったことが記され、薩摩では見られない菓子を
進上したことが注目されます。他にも薩摩の人へ
当時は貴重な食材である砂糖を使用した甘物をも
って進物とし、厚遇していたと推察されます。

2. 福地家文書の公務日記にみるもてなしの事例

那覇士族・福地家で受け継がれてきた文書群
「福地家文書」には、薩摩役人らの接遇役である
御仮屋守や大和横目、那覇の行政官である御物城
といった役職を勤めた際の記録が残されています。

うち、高里親雲上唯紀の日記（1852～1854）には、
在番奉行および産物方の役人の在任中におけるウトウイムチ（おもてなし）の
先例をまとめた記事「御取持次第」が収められ、節句や折目の年中行事毎に、
折目物・祝儀として送られていたものが記録されています。他にも諸日記類か
ら那覇や周辺の村で行われる綱引、爬龍船競漕（図2）、競馬、久米村の聖廟で
行われる祭祀、「あふしはらい遊」等の見物に際
して重箱や提げ重、東道盆に詰められた料理が
ふるまわれたことがわかります。

福地家文書には上述のような行事の場の宴席
の次第・献立も記録されています。例えば、貝
姓七世唯延が御物城職在任中の日記の 1873 年
閏6月12日条によると、在番奉行らが那覇の役
所である親見世前で那覇四町の綱引きを観覧、
その際東道盆二台、西瓜などの馳走でもてなし
していました。薩摩役人の在留中、琉球の伝統的
な行事や祭礼の場がもてなしの場・機会となっ
ていました。

【おわりに】

王国時代の公務日記・行政文書類には上記の事例の他にも様々な接待の場
での次第・献立が記録されています。「夜御嘶」と称される茶事の宴席の記事には
30種以上の豪華な料理の献立が記され、日本の宴席の形式・作法にならった次
第で饗応が行われたことが窺えますが、今後、琉球側や日本側の料理や規式に
関する史料を用いて比較検討することで、琉球の食文化の系譜や伝播を明らか
にすることができると考えています。



図1 堆錦で加飾された重箱
「朱漆山水樓閣人物堆錦螺鈿四段重箱」
（一財）沖縄美ら島財団所蔵

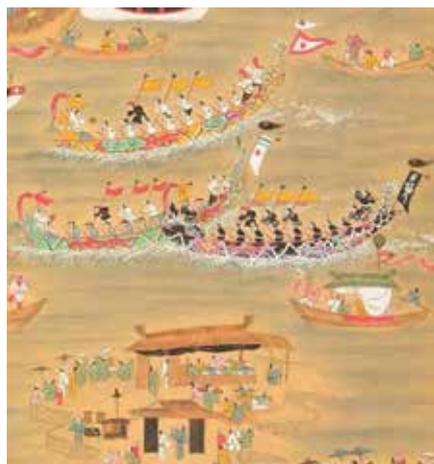


図2 「爬龍船競漕及び帰唐船図」（部分）
（一財）沖縄美ら島財団所蔵

培養技術で琉球列島のランを守る

植物研究室 徳原 憲

【はじめに】

琉球列島は狭い面積にもかかわらず、日本全体の40%を超える58属139種ものランが自生しています。「ランの宝庫」とも言えるこの地域にはイリオモテトンボソウやクニガミシュスランなど貴重な固有種（亜種）も存在します（図1）。しかし、こうしたランの多くは様々な理由で絶滅の危機に瀕しており、保全対策が求められています。植物研究室では現地調査から実験室の活動を通して、琉球列島のランを守る活動に取り組んでいます。今回はその中でも力を入れている、培養技術を用いた保全について紹介します。



図1. イリオモテトンボソウ（左）とクニガミシュスラン（右）

【植物の培養技術】

植物は、細胞1個を人工的な培地において、一つの植物体まで育てることが可能です。この技術を組織培養技術といいます。現在、私たちの生活に利用されている多くの植物がこの技術の応用により広まっています。例えば、イチゴでは茎の先端部分の生長点と呼ぶ組織を切り出し、培養することで新しい苗を増殖しています。この技術はサツマイモなどの根菜類や果樹、カーネーションなどの花卉類の苗生産に利用されています。他にも、ユリなどでは異なった種を交雑し未熟な胚を培養して新たな品種を作成する技術、野菜では育種年限を短縮するため、花粉や葯を培養する技術などが開発されています。

【ランを守る培養技術】

① 種子から

植物研究室では、この技術を希少種保全へ応用する取り組みを進めています。ただ、絶滅の危機に瀕する植物を組織培養で増やすことは、多様性の欠如や、培養中の変異等の発生で自然に無い株を作ってしまう可能性があり、望ましい方法とは言えません。よって自然の株から採取した種子を発芽、生育させるための培養技術を利用しています。

② ラン菌の代替の技術

一般に、ランの種子は非常に小さく、発芽・生長に必要な栄養を蓄える胚乳を持っていません。発芽・成長のための栄養は「ラン菌」と呼ばれる糸状菌（キノコの仲間）から得ています。このラン菌はどこにでもいるわけではなく、また、ランの種類によって菌の種類が異なりますので、ラン菌の代わりに人の手で種子発芽に必要な栄養を与える培養技術が必要となるのです。

③ ランの特性に応じた技術

オキナワセッコクやナゴランなどの「着生ラン」と呼ばれる種では発芽が容易なものが多いですが、「地生ラン」と呼ばれるエビネ、温帯性シンビジウムなど発芽が難しく、中でもアキザキナギランやホウサイランなどは、発芽しても植物体まで育てにくい種もあります。こうした性質の原因を特定し、最適な培養条件を構築するのが我々の研究で、スライドでいくつかの例を詳細に報告します。なお、図2. のイリオモテトンボソウは絶滅寸前の西表島固有亜種ですが、培養条件を工夫することにより世界で始めて培養に成功しました。

【今後の展望】

現在までにおよそ20種の琉球列島のランについて培養技術を構築してきました。しかし、これらの他に、培養の難しい種や種子の入手すら出来ていない種がまだ多く残されています。こうした種についても継続して調査を行い、より多くの種の保全に努めていきます。また、増殖した株は海洋博公園の展示などを通じて、琉球列島の貴重なランの存在を皆様に伝えていこうと思っています。

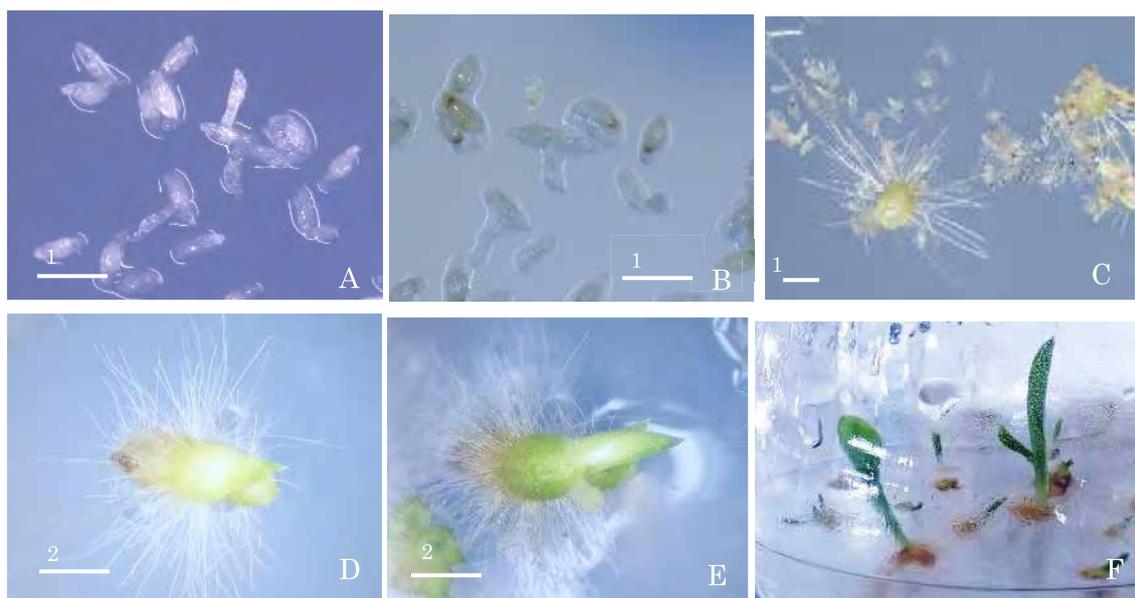


図2. 無菌培養技術によって発芽・生育に成功したイリオモテトンボソウ

水族館発！サメの繁殖生態学最前線

動物研究室 富田 武照

【はじめに】

2007年、沖縄美ら海水族館でナンヨウマンタが一尾の赤ちゃんを出産しました。この出産は、世界で初めて人類がマンタの出産に立ち会った出来事として、水族館関係者だけでなく、世界の板鰐類（サメ・エイ類）の研究者に衝撃を与えました。一般的に、繁殖生態を解明するためには、生体からの情報が必要不可欠です。しかし、ナンヨウマンタやジンベエザメといった大型板鰐類の飼育には大掛かりな施設が必要であり、大学などの研究機関での研究は困難です。そのため、水族館は板鰐類の繁殖生態学の研究で大きな役割を果たしてきました。沖縄美ら海水族館では約20種の板鰐類の飼育下出産に成功していますが、実にそのほとんどが世界初の事例です。

我々の飼育生物を用いた繁殖生態学の研究には、最新技術の導入や開発が重要な役割をはたしています。今回、そのなかから2つのトピックスについて最新の研究成果を紹介します。

【水中エコーで追う赤ちゃんの成長】

板鰐類の多くは、ヒトと同じく赤ちゃんを子宮で育ててから産み落とします。子宮中の赤ちゃんの観察には、一般的にエコー（超音波画像診断装置）が用いられますが、水中生物である板鰐類で用いるためには、母親を水上に取り上げなければなりません。これは大きな負担となってしまいます。そこで我々は防水・耐圧のエコー（水中エコー）を開発し、水中で母親の検査ができるようにしました（図1）。

この新技術を用いることで、これまで謎にまつまれていたサメの赤ちゃんの子宮内での生態の一端が明らかになってきました。例えば、オオテンジクザメの子宮内を三年間にわたってモニタリングしたところ、赤ちゃんが（1）子宮内を活発に泳ぎ回り、（2）頻繁に左

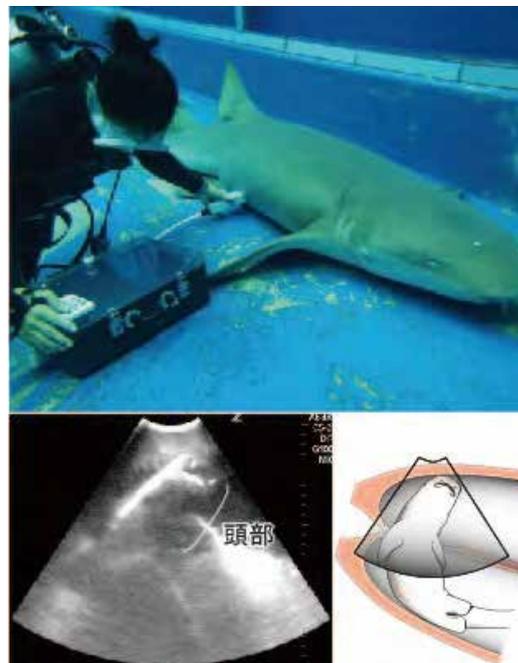


図1 水中エコーを用いたオオテンジクザメの妊娠診断の様子（上）と、赤ちゃんのエコー画像（下）

右の子宮を行き来し、(3) 出産前になると、子宮の出口から外界を覗き見ていることなどが明らかになりました。これらの行動は、子宮内での動きが強く制限されている哺乳類の赤ちゃんとは対照的です。今後、同様の観察を続けることで、板鰓類の赤ちゃんの生態の多様性が明らかになっていくことが期待されます。

【血液を用いた妊娠診断】

血液には、体内の情報がたくさん含まれています。そこで、飼育板鰓類から血液を採取し、繁殖にかかわる情報を抽出すべく研究を行っています。この研究の最初の難題は、水槽内を泳ぎ回っている板鰓類から、いかに採血するかということでした。試行錯誤の結果、たとえばジンベエザメでは、胸ビレから採血できることが分かりました(図2)。現在では種類ごとに採血技術が確立しています。

採血ができるようになったことで、飼育板鰓類の性ホルモンをモニタリングすることが可能となりました。その結果、水族館で20年以上にわたって飼育されている雄のジンベエザメが、2012年に成体になった(性成熟した)ことが分かりました。さらに、ジンベエザメの近縁種であるトラフザメの性ホルモンの周年変化を調べることで、雌の排卵期が春から初夏であることも分かりました。近年では血液中のRNAという物質を調べることで、ごく少量の血液から妊娠診断を行う技術の開発を行っています。



図2 ジンベエザメの水中採血の様子

【さいごに：サメの保育器】

最後に、研究が始まったばかりのサメの保育器について紹介します。ヒトの場合、赤ちゃんは早産しても、生命を維持する装置・保育器により、高確率で救命することができます。サメの保育器の開発は、我々の繁殖研究の集大成とも言えるものです。なぜなら、その製作には、サメの子宮と赤ちゃんの生理について十分な知識と理解が不可欠なためです。

現時点ではサメの保育器はまだ夢の技術です。現在、試作機の作成、サメの赤ちゃんに必要な酸素量の測定などの基礎的な研究を開始しました。遠くない未来に、早産してしまったサメの赤ちゃんを救命できる日を夢見て、我々は日々研究を行っています。

目的 | Mission

1976年に設立された財団法人海洋博覧会記念公園管理財団は、これまで実施してきた事業を継続しつつ新たな事業にも取り組むべく、平成24年10月に一般財団法人沖縄美ら島財団に名称変更しました。

当財団は、これまで実施してきた国営沖縄記念公園の維持管理運営業務を主体に、亜熱帯性動植物に関する調査研究、技術開発や知識の普及啓発に関して豊富な成果の蓄積、ノウハウを持っています。

一方、近年、地球温暖化、生態系の危機等、様々な環境問題への対応、沖縄の自然環境、歴史的風致を活かした観光や産業の振興、地域との連携、公園利用ニーズの多様化等に対応した公園の管理運営等、様々な課題が取り上げられるようになって来ました。

当財団としては、これからも調査研究事業や普及啓発事業、公園の管理運営等を通じて培ってきた知見、技術等の能力を結集し、これらの課題に応えることにしています。そのため、総合研究センターを拠点に、長期的視点に立ち、社会的ニーズの高い環境問題、産業振興、公園機能の向上等に関する調査研究・普及啓発事業を拡充、推進し、更なる社会貢献を果たしてまいります。



目標 | Objectives

「環境問題への対応」

[Solving Environmental Problems]

豊かな自然環境や多様な生態系を維持するため、サンゴ・ウミガメ等の海洋生物やラン類等希少植物の保護・育成、環境緑化等を推進し、生物多様性の保全、地球温暖化等の環境問題に対応します

「産業振興への寄与」

[Promoting Ties with Industry]

在来植物の利用開発や熱帯果樹等有用植物の肥培管理技術、組織培養を用いた大量増殖技術の確立、有用な海生生物の繁殖・育成技術の開発等により産業振興に寄与します

「公園機能の向上」

[Improving Park Management Skills]

公園利用者ニーズの把握や満足度の向上、効率的・効果的な管理運営に関する調査、技術開発等により、魅力ある緑地空間を提供します。またレクリエーションや環境学習、地域連携など多様なニーズに対応した公園の機能向上を図ります

事業推進体制

[Structure]

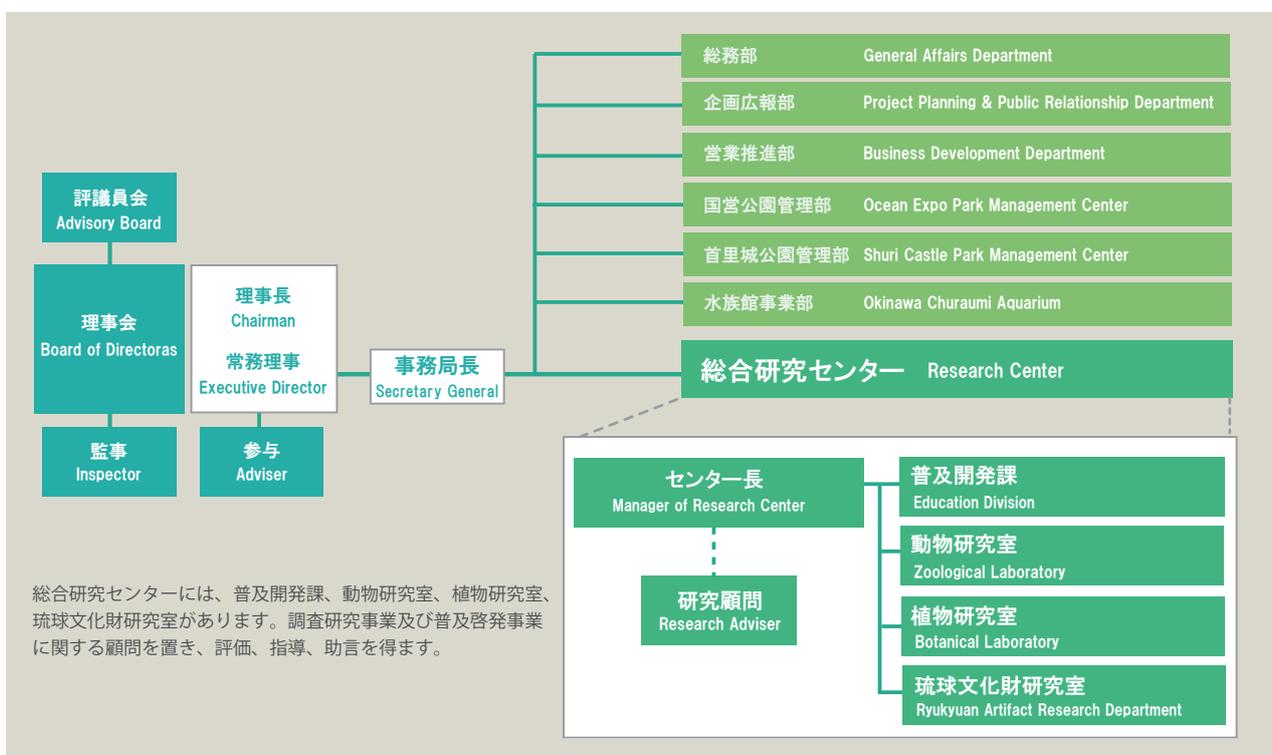


実施体制 | Implementation System

調査研究・普及啓発事業を効果的・効率的に推進するため、自主研究、共同研究、受託研究等による機能分担を行い、各研究の内容に応じ適切な方法で調査研究を推進するとともに、その成果等の普及啓発を行います

組織体制 | Organization System

総合研究センターは、総務部、企画広報部、営業推進部、国営公園管理部、首里城公園管理部、水族館事業部と並列した組織です



普及開発課

Education Division



総合研究センターの調査研究成果を活かした教育学習プログラムや事業の開発・実施、海洋文化に関する調査研究を行い、地域連携、公園機能の向上に寄与します

職員数：8名(学位保持2名)
施設：総合研究センター視聴覚室、美ら島自然学校

動物研究室

Zoological Laboratory



熱帯・亜熱帯域の海洋生物に関する調査研究を行い、希少生物の保全や水族館機能の向上に寄与します

職員数：12名(学位保持8名)
施設：実験室、検査室、飼育室、標本保管室(3部屋)、作業室(解剖等)

植物研究室

Botanical Laboratory



熱帯・亜熱帯性植物に関する調査研究・技術開発を行い、希少植物の保全、沖縄の産業振興、公園機能の向上に寄与します

職員数：8名(学位保持2名)
施設：乾燥標本室、材料調整室、育成室、圃場

琉球文化財研究室

Ryukyuan Artifact Research Department



首里城及び琉球王国時代の歴史と文化に関する調査研究、伝統技法の復元に関する技術開発等を行い、公園機能の向上に寄与します

職員数：10名(学位保持1名)

事業内容 / 調査研究事業

[Projects / Research Details]

海生生物に関する調査研究・技術開発 Conducting Basic & Applied Research: Animals



- サンゴ礁の生物多様性の保全を目的とした造礁サンゴや海藻類のモニタリング及び飼育下における繁殖研究
- ウミガメ類の生息状況の把握と保全を目的とした産卵、混獲および漂着状況、遺伝学的調査、回遊調査および飼育下における繁殖研究
- ザトウクジラ等の鯨類の保全を目的とした、生息および漂着状況のモニタリングや飼育下における繁殖研究
- 琉球列島における魚類や無脊椎動物などの標本の収集や分類学的調査、生物相調査など生物多様性の理解に資する研究
- ジンベエザメやマンタをはじめとする大型のサメ・エイ類の長期飼育と飼育下繁殖を目的とした比較解剖・内分泌・組織学的研究

植物に関する調査研究・技術開発 Conducting Basic & Applied Research: Plants



- 沖縄の絶滅危惧植物等の保全・活用を目的とした希少植物に関する調査研究・技術開発
- 亜熱帯性植物の利活用を目的としたラン類・熱帯果樹・花木・観葉植物等有用植物の導入、肥培管理、大量増殖技術、新品種開発に関する調査研究・技術開発
- 沖縄の在来植物の利活用を目的とした芝生・地被類・草花等に関する調査研究・技術開発
- 環境保全、緑化推進を目的とした壁面・屋上緑化等特殊緑化、植物管理技術、新たな緑化資材等に関する調査研究・技術開発

歴史や文化に関する調査研究・技術開発 Conducting Basic & Applied Research: History and Culture



- 首里城及び琉球王国の歴史と文化、伝統技法の復元に関する調査研究・技術開発
- 沖縄とオセアニア地域をつなぐ海洋文化に関する調査研究
- 琉球列島における海洋文化に関する調査研究

公園機能向上に関する調査研究・技術開発 Conducting Basic & Applied Research: Park Management Skills



- 海洋文化館等公園内施設の利用促進に関する調査研究
- 国内外の先進的な公園管理及び展示手法に関する調査研究・技術開発
- 沖縄観光資源の情報集積、活用に関する調査研究

事業内容 / 普及啓発事業

[Projects / Promotion Details]

人材育成事業 Developing Human Resources



- 子供から大人まで、幅広い層を対象とした各種講習会の実施
- ウミガメやサンゴ、川の生き物等、沖縄の自然を題材に自然環境について学ぶ環境学習プログラムを開発し、地域の小学校との連携により実施
- 企業等との共催による県内の小中学生を対象とした事業の展開
- 地域緑化活動を推進する指導者の育成に関する講習会の実施

地域連携事業 Cooperating with Local Communities



- 沖縄県北部地域及び周辺離島の環境保全活動に取り組む団体等の支援を目的とした「環境保全活動支援エコクーポン事業」の実施
- 大学との連携により、一般や大学院生等に対する講座を実施
- 地域と連携した沖縄の動植物、伝統的な暮らしや文化に関する情報発信

助成事業 Subsidy Program



- サンゴやウミガメ、希少動物等の亜熱帯性生物および熱帯果樹や花木、沖縄の希少植物等の亜熱帯性植物に関する調査研究・技術開発に対する研究助成
- 首里城や琉球王朝の歴史・文化、海洋文化に関する調査研究・技術開発に対する研究助成
- 沖縄県における自然環境保全とその適正な利用に関する普及啓発活動への活動助成

国際交流事業 Promoting International Exchange



- 国内外の大学、博物館、水族館、植物園等とのネットワークの強化を図り、情報発信、交流事業を推進
- 海洋文化国際シンポジウム、沖縄国際洋蘭博覧会、海洋生物に関する国際シンポジウム等の開催

図書・機関誌の発行 Publishing Books and Journals



- 総合研究センターの事業内容を収録した「事業年報」の発行
- その他、調査研究等成果に関する図書、ガイドブックなどの発行

所在地・連絡先 | Contact



那覇 ●● 首里城公園
Naha ●● Shurijo Castle Park



一般財団法人 沖縄美ら島財団 総合研究センター

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川888 | TEL:0980-48-2266 / FAX:0980-48-2200

Okinawa Churashima Foundation
RESEARCH CENTER

888 Ishikawa, Motobu-cho, Kunigami-gun, Okinawa, Japan 905-0206 / TEL: 0980-48-2266 / FAX: 0980-48-2200

沖縄美ら島財団公式 Facebook ページ <http://www.facebook.com/okinawa.churashima>

E-mail : ocrc@okichura.jp | Official Website URL : <http://churashima.okinawa/ocrc/>



2019.09



一般財団法人

沖縄美ら島財団

Okinawa Churashima Foundation